

ジェスチャーの同期とその志向要因 —一人はなぜジェスチャーを合わせるのか—

勝代 健太[†] 阪田 真己子[†]
[†] 同志社大学文化情報学部文化情報学科

1. はじめに

コミュニケーションの場において、2人以上の参加者が同じタイミングで同じジェスチャーを行う現象は「ジェスチャーの同期」と呼ばれている。これまで、ジェスチャーの同期については、その達成過程や相互行為に与える効果に焦点を当てた研究が散見されるが(例えば城(2018)など)、ジェスチャーの同期研究そのものは少なく、とりわけ定量的なアプローチによるものはほとんどない。そこで、本研究では、実験室実験によって、ジェスチャーの同期を定量的に抽出し、その志向要因を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

女性 54 名(19.85±0.86 歳)を実験協力者とした。実験では、ペアでのワークの後、その詳細の説明を行ってもらい再生課題を行わせ(ペア/単独)、その様子を 2 台のビデオカメラで収録した。再生課題後、協力者の個人特性として多次元共感性尺度(鈴木ほか, 2008)への記入を求めた。

ペアでの協同再生の映像から、ジェスチャーの同期箇所を抽出した。また、協同再生時の会話要素として「発話時間」「発話重複時間」「ジェスチャー回数」を抽出した。

3. 結果

3.1 同期の種類

収録したデータより、ジェスチャーの同期には 2 種類のパターンがあることが観察された。1 つ目は、同期の際、両者がジェスチャーを合わせることを志向した上で生成される同期(以下、双方向型)、2 つ目は、1 名のみがジェスチャーを合わせることを志向することによって生成される同期(以下、一方向型)である。

同期頻度に影響している要因を調べるため、課題中の同期頻度を従属変数、測定した各個人特性と各会話要素を独立変数として、双方向型、一方向型それぞれについて重回帰分析を行った。その結果、いずれも 5%水準で有意な重回帰モデルが導出され、双方向型では個人特性(共感性)が、一方向型では会話要素が独立変数として同期頻度に寄与していることがわかった(表 1)。

3.2 冒頭の同期とその後の同期

協同再生冒頭での同期の生成が、その後の同期頻度に影響するのかを調べるため、課題中の同期頻度を従属変数、協同再生冒頭時とその直後に行われる説明時の同期の有無(有/無)を独立変数として、参加者間要因による二元配置分散分析を行った。分析の結果、協同再生冒頭時の同期の主効果のみ認められた($F(1, 23) = 4.691, p = .003, \eta_p^2 = .301$)。各水

準における平均値のグラフを図 1 に示す。

表 1. 独立変数の標準回帰係数と有意確率(ステップワイズ法)

	独立変数	標準回帰係数	有意確率
双方向型	他者指向的反応	.376	.015
	視点取得	-.542	.004
	自己指向的反応	-.450	.005
一方向型	発話時間	-.472	.023
	発話重複時間	.567	<.001
	ジェスチャー回数	.400	.055

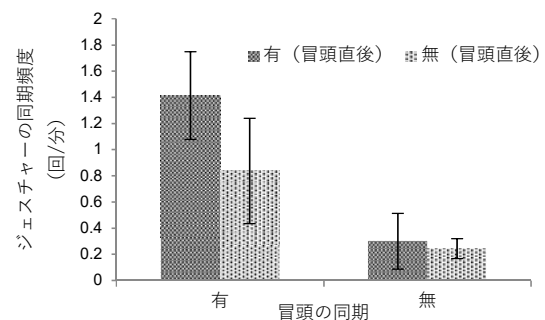


図 1. 冒頭での同期の有無と同期頻度の平均値

4. 考察

「ジェスチャーを他者と合わせる」ことは、同期した者同士が同じ知識を有していることを他者に伝達する機能を有している(城, 2018)。これに加え、本研究で導出された重回帰モデルより、ジェスチャーの同期が、協力意思といった「参加者の姿勢」も伝達可能であることが示唆された。また、本結果は、ジェスチャーの同期は繰り返し可能な会話方略の 1 つであるという城(2018)の知見を支持するものとなった。つまり、ジェスチャーの同期は偶然生じるものではなく、参加者による意図的な会話方略として生成されるものと考えられる。

5. まとめ

人は協同相手以外の第三者に対して外部指向を行うために、ジェスチャーの同期を志向していることが示された。これまでのジェスチャー研究においては、ジェスチャーの機能が参加者間の直接的な内部指向性のみに着眼されていたことに鑑みると、ジェスチャーの同期が会話の外部に指向している可能性を示した点は極めて意義深い。

参考文献

- 城, “多人数会話におけるジェスチャーの同期”, ひつじ書房, 2018.
- 鈴木ほか, “多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—”, 教育心理学研究, 56 巻 4 号, pp487-497, 2008.